

●高澤良一 第十一句集 石鏡

●一月―三月

万年青の実陳ひねていやはや面白し

我が起てる埃の見ゆる大旦

池氷り居るといきいき申しをり

広がりて氷らぬものに鴨の水脈

鴨急ぐ方面白きことあらむ

水鳥の羽ばたくことの終に無し

氷らざる池半分を鴨往き来

初閻魔鎌倉 円応寺眼光通らぬところ無し

初閻魔鼻腔より息出し入れす

初閻魔凍みを振り切る大木魚

かんばせに転読の風初閻魔

初閻魔転読僧の夷ごゑ

あべこべに肌着着たるか大旦

草亀の一投足に日脚伸ぶ

年祝ぎの餅召せ井戸神廁神

じっくりと廁窓より初景色

人日の耳搔きの塗り剥げてゐる

ザラ紙に鉛筆とりて歳旦吟

初詣参道だだっぴろきかな

年賀用生菓子鶴亀しつとりと

誤植訂正はやばやと載せ新年号

うろ覚え唱歌張り上げ初湯殿

年祝ぐに洒落てのむ酒ジンライム

年立つと宣ふ鹿のやうな貌

軽トラ三浦半島 盗人崎ック横付けにして大根引

光降る大根台地の大根引

大根台地はたて涯に狂ふ沖つ波

覆る白濤を背に大根引

潮けむり大根台地のどん詰り

背をどつく新手の風や大根引  
天つ日と風を糧とし岬大根  
みしと来て葉欄に節分まへの雨  
明日節分雨草木をうるほして  
鎌倉建長寺 節分会五山一位禅林の梅固し  
梅万扁額蕾爆けて「天下禅林」に  
豆撒けり天下禅林天空に  
追儼法要転読海東法窟に  
ぴぴぴぴと追儼会の燭伸び縮み  
法堂に太鼓どんどろ追儼寺  
節分櫻川 ぴん助 一座興行八幡宮 節分会ぴん助一座かっぱれを  
袂持ちミス鎌倉の福まねき  
春招く和菓子「きざはし」段葛  
探梅の手土産鳩の豆落雁  
春望の甲板三百六十度  
昼霞LING天然ガス積む船の影  
安房へ船立春を経て海大人し  
東京湾横断フェリー春濤切り  
立春の洋上に我解き放つ  
浪漫あり海猫舞ふフェリーターミナル  
踏切の傍に菜の花のほほんと  
悠久の青空があり花菜の上  
菜を摘みに車は袖ヶ浦ナンバー  
押し移る日翳は見えず花菜畑  
和田浦に遊んで鯨のステーキを  
ひつじ田の照る中往けば老け込みさう  
和田浦のあらせいとうのかほる径  
和田浦の金柑海に照り負けず  
南房の花摘み濤色スターチス  
ハウス物あらせいとうを家苞に  
古草につらつら安房の日の射せる

花菜見に足を延ばして江見太海  
花菜の香むんむん太海小学校  
鑄錨アロエ枯草部落の端  
笹鳴仁右衛門島のそつちへ行けば島の端はな  
笹子来て島の竹藪こそつかす  
渡船待つ仁右衛門島の冬日向  
少しもの足らぬ花数ハケの梅  
甘んじて小さき野蒜も引きにけり  
雑木山百度鳴りて寒明けぬ  
立春を相変はらずの坊主山  
それではとものは試しの紙懐炉  
紙懐炉そんな齡では無けれども  
芹の水覗き込むにも先づ足場  
芹引けばたらたらと水一縷  
そつけなき彩の白梅晒に  
盗み見をしてゐるやうな藪椿  
探梅といふにはあつさり戻り来ぬ  
城郭の一部をなせる梅の花  
寒明と探りを入れるやうな眼を  
春寒の家押す風の音どすん  
春の雲見てゐる我も押し移る  
改札にべつとう時化の欠航札  
欠航にて安房の雛罌粟摘がふい  
群衆の隙間に落ちぬ年の豆  
大根畑にし西風に雀の顔細め  
あんこ玉薄皮冴えに冴えにけり  
只横に並べてひひな飾りけり  
春荒れの吹っかけ来たる真夜の雨  
春荒れの叩きつけてはひっぺがす  
崎人に白群青びやくぐんの空大根引く  
鏡凧切干は瘦せ細りけり

万作は微風を糧として漫ろ  
雛飾る孫二人目の春なりけり  
接骨木の芽のもし囁くなら平語  
先達あり渡る鳥にも吾が身にも  
梅汚れゐる頃ならむ瑞泉寺  
山梔子の実に手をつける鴎なりし  
春は曙けふあれすべくこれすべく  
遠景の暮れてゐるなり退紅空あらぞめ  
春そこに通草細工の鳩車  
川風に鼻昂然と冬磧  
日が入り過ぎても困る冬机  
部屋に一人焼藪の香と漂へる  
山梔子の実に夕栄えのいつまでも  
谷戸冷えてはうれん草に甘味増す  
春が来る港鷗のモニュメント  
癌通りすといふ爆弾抱え谷戸梅見  
探梅にうつつを抜かす顔ぶれは  
刮こそげ落とす梅林の土しぶときを  
おにぎりの包解く音梅ほとり  
探梅のはてこの道でよいのやら  
春の川渡りとよもす東横線  
手を遣りし先に首筋二月盡  
シベリヤを食おせばいよいよ寒明くか  
眼鏡のつる擦れし一処寒戻り  
山椿人目があればはばかられ  
ぎうとこゑ居ること確か春の鴟  
正面に現れてまさかの春の鴟  
素っ首をくるりくるりと春の鴟  
さんしゆゆの彩させる芽の暮れかかり  
裁ち物の音のぞりぞり春の昼  
行きずりのこれある哉の花ミモザ

桃の花鄙びごころを大切に  
海へ出てよりの俊足春の雲  
辛夷の芽躍らす風のひっきりなし  
陽気まだどつちつかずの冬木の芽  
摘草の籠はとみれば野かんぞう  
晚酌に摘む芹これだけあれば佳し  
芹摘の一人ひよっこり頭を擡げ  
さうですか食べられますか野かんぞう  
野遊びの帰り支度か服叩き  
母上に八十八度草萌えて  
スタジオに持ち込む河津の初桜  
啓蟄のかさぶた剥がす男の子  
豆の芽のどれも万歳してゐたる  
始祖鳥のやうな文様氷面鏡  
でも好きとだんご虫掌に這はせゐる  
クレヨン画へんてこりんな蝶飛ばせ  
己が浮力持て余しをり通し鴨  
きさらぎのどの顔も皆勝れ見ゆ  
玻璃に風どすんとばかり春浅き  
春荒れがつかかけ来りて家が鳴る  
春疾風聞きゐる我が身がらんどろ  
梅咲かせて廻る美よき風吹く日なり  
春水といふこゑ大きめに出でて  
礁攀つごうなの六根清浄と  
些少の借り皆持ち合はせ鳥雲に  
結構なミモザと云ひて仰ぎをり  
ゼンマイと云ひかけコゴミと云ひ直す  
土産さて静岡駅の山葵漬  
青竜の如き山葵の擦り下ろし